

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520508  
 研究課題名(和文)異文化体験の主観的記述を促す教材の工夫 『言語ポートフォリオ』のために

研究課題名(英文) Developing a tool leading to intercultural awareness

## 研究代表者

姫田麻利子(HIMETA MARIKO)  
 大東文化大学・外国語学部・准教授  
 研究者番号：50318698

研究成果の概要：日本の初習外国語教育が、目標言語話者との出会いが差し迫ったものではない中で異文化間能力育成の結びつきを具体的にするには、「異文化間の気づき」能力の育成と実際的评价が必要である。本研究では、異文化体験時の主観的記述を、自省と「異文化間の気づき」能力証明、将来的発展の道標として有機的に組織し、また評価対象として読む他者の存在を想定した有機性も持たせるための指示文を備えた教材を日本人大学生向けに提案した。

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育(3005)

キーワード：(1)異文化間能力(2)ポートフォリオ(3)言語バイオグラフィ(言語に関する自伝)  
 (4)フランス語(5)カルチュラル・アウェアス(6)異文化間の気づき(7)ジャーナル  
 (8)大学生

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) CEFRおよびELPの国際的インパクト

欧州評議会現代言語部は、2001年に『外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(CEFR)を発表した。そのねらいは、異なる環境で言語教育にたずさわる者同士がより効果的な国際的共同作業を進め、異なる言語能力資格の相互認定を容易にし、欧州内のより活発な人的移動を保証することだった。CEFRと合わせて提案された『言語ポ-

ートフォリオ』(ELP)は、学校教育の範囲に限らず異言語・異文化体験を記録するための教材で、各個人にとって、既得能力とその将来的な発展を見つめる場としての機能と、既得能力について公的な認知を受けるための履歴書としての機能をもつ。

CEFRはあくまでも提案で「決定を先取りするものではない」にもかかわらず、欧州評議会加盟国内に限らず日本の欧州語教育現場でも、その例示的能力記述文が(象徴的)権威的基準のように紹介された。ELPに関して

は、CEFR による「聞く」「読む」「会話参加」「話す」「書く」各能力ごと、A1～C2 レベルごとの例示的記述文の提示された、自己評価用チェックシートとして受け止められることもしばしばである。

### (2) 異文化間能力記述と ELP 目的の再検討

一方、欧州では、2001 年版 CEFR と現行 ELP は、異文化間能力 (Intercultural competence) について十分な認知に到達していないという議論が始まっている。この議論において、異文化間能力とは、目標言語が話される社会における文化知識や言語・非言語を適切に使える社会言語能力ではない。現在、欧州における異文化間能力に関する考察はおおよそ二つの方向性で動いている。異文化間の誤解や対立に対処する行動の観察データを集積しようとする方向性と、学習者自身に自文化、目標文化の主観的定義に対する内的気づきを記述させる方法を検討する方向性の二つである。CEFR は、前者については A1 C2 の段階別評価基準を伴っていないが検討の対象となっている。しかし、後者については “Awareness (気づき)” という述語の導入に反して、学習者の主観認知があいまいである。問題となるのは、異文化体験時の主観を自省的に捉え、言語表現化する能力である。自文化、目標文化の主観的定義に対する内的気づきを異文化間能力のひとつに認知するなら、ELP もその認知のしくみを備える必要がある。学習者による内的気づきの言語表現化自体を能力証明とするなら、ELP はその表現の場に相応しい。学習者自身による主観的記述を増やすことで、ELP に約束された機能である「言語バイオグラフィー」の「自伝」性を高めることができる。

### (3) 日本の大学初習言語教育における文化的目標の実現

日本の学校教育における外国語学習、とくに英語以外の言語学習の目標は、目標言語話者との出会いが差し迫ったものでない為もあって、「異文化理解」や「視野を広げる」という抽象的な理念に支えられるところが大きい。とはいえ実際には、言語能力を少しでも上の段階に運ぶことに時間を割き、目標社会に対して学習者が持つ主観については、将来的な渡航後の個人の問題として先送りされている。「異文化間の気づき」育成、証明のための道具開発は、国際的な研究の進展に貢献するだけでなく、日本の大学初習言語教育と異文化間能力育成の結びつきを具体的にするはずである。

## 2. 研究の目的

### (1) 「異文化間の気づき」の再定義

CEFR の異文化間能力への批判に関する論文、各国で刊行されている ELP の異文化間能力に関する項目を含め、先行研究をレビューし、また日本のフランス語学習者のデータに即して、“Cultural Awareness (異文化間の気づき)” に関する定義を再検討する。

### (2) 異文化体験の主観的記述を促す指示文・指標キーワードの検討

その上で、日本人大学生が異言語・異文化文化との出会い・付き合いの中で主観を見つめ、「視野の広がり」の内実を記述し、異文化間能力の発展を自ら測るための ELP 型教材を考案する。体験時の主観的記述は、母語による記述だとしても、白紙の日記帳が用意されるだけで自動的に可能になるわけではない。学習者が書き手であり同時に読み手となって独自に進める教材には、自省と気づきをうながす指示文や指標キーワード集を用意する必要があるだろう。本研究の目的は、異文化体験時の主観を自省的に捉え言語表現化することを促す具体的な指示文と指標キーワードを備えた教材の開発である。

## 3. 研究の方法

### (1) 先行研究レビュー

外国語教育が責任を負うべき異文化間能力の定義に関して、国内外の研究者の論文をレビュー。当該研究者と各国の動向について直接意見交換も行う。また、経験の「自省」「内省」を促す方法論について、教育学分野、社会学分野の論文をレビュー。それを踏まえ、「異文化間の気づき」の再定義を行う。

### (2) 教員自身による主観的記述の実験

外国語教員は、日常の仕事の中で自分の異文化体験を語る機会を多く持つ。教員も、それぞれの主観によって自文化・目標文化のイメージを構築しているに違いないのだが、正統な情報提供者を自任し、教室で行う証言の中には主観を交えてはならないと考えがちで、なかなか主観を主観として自省する機会を持たない。大学でフランス語を教える研究代表者と連携研究者が、授業中に語ったことを記録し、その項目について自身の体験を振り返り、記述し、またそれを交換して読み、深めた方がいい点を指摘し合う作業から、有効な指示文や指標キーワードを収集、整理する。

### (3) ジャーナル実験

(2) の結果を参考に、策定した指示文と指標キーワードを、レイアウトを考慮して日記帳形式の教材に組み込む。研究代表者およ

び連携研究者が引率するフランス語現地研修旅行参加の大学生に試験的に導入し、結果に即して改訂を行う

#### 4. 研究成果

##### (1) 「異文化間の気づき」の再定義

先行研究レビューにより、また研究代表者が過去の関連する研究の中で得た学生記述のコーパスより、以下のように定義できる。「異文化間の気づき」とは、エスノグラファーとして目標文化を観察しながら、その観察結果の内に自文化に根ざす視点を見つけ、その視点について不特定の読者に向けてインフォーマントとして語ることでできる能力である。能力獲得の過程で、異文化体験に関する記述の中で、エスノグラファーである自己とインフォーマントである自己の対話が見られる。異文化体験の断片的な記録だけでは不十分で、まず自分にとって、自省と能力証明、将来的発展の道標として有機的に組織されなければならないが、評価対象として読む他者の存在を想定した有機性も持っていないなければならない。

##### (2) 「内省」促す手続き

教育学分野、社会学分野の先行研究レビューにより、また上記研究の方法の(2)により、ものごとを、多面的に見つめながら、自ずと自己の認識の深まりと変革をもたらすには、<つづき書き>と<読みかえし>の繰り返しが必要となる。さらに、主観を繰り返し自省した軌跡としての有機的テーマを明らかにする<まとめ書き>が必要である。

##### (3) 段階的に自省を促す指示文

2007年9月の実験結果を踏まえ改訂された、(本研究における)最終版のジャーナルの構成は以下とした。

<つづき書き> 指示文: 「フランスで、思ったこと、感じたこと、気づいたこと」「どんな場面?」「なぜ、私はその時、そのことが気になったんだろう?」「その時の対象までの焦点距離、私の視野: 街なみ、遠景、人々は見えている、話の内容は聞こえない、顔が見えて語は聞こえているが、私は参加していない、私の参加したコミュニケーション」「左のページに書ききれなかったら、こちらのページに続きを書きましょう。右ページから矢印で延ばしたり、工夫して自由に使ってください。」

<読みかえし>および<まとめ書き> 指示文(5日ごと): 「1. 現在のあなたの感じ方と合うものに✓を入れてください。: フランスやフランス人のある側面が見えた時、一方で、何故自分はその側面を気にするのか考えるようになった、フランスやフランス人のある側面が気になった時、別の見方はできない

か考えてみるようになった、私の出身文化の価値観が、私のフランスやフランス人に対する視野を決定していると気づいた、以前のイメージとは異なる側面が見えた、フランスは~、フランス人は~、と一般化して言うことが難しくなった、日仏の違いは、思っていたより小さかった」「2. 今日までに書いたページを読みかえしてください。何が変わったと思いますか。」「3. 変わる前、あなたはなぜ、そんな風に考えていたのだと思いますか。変わる前のあなたにアドバイスできるとしたら、何と言いますか。」「4. 変わっていないのは、どんなことですか。」「5. それはなぜ、変わらないのだと思いますか。」

##### (4) 学生によるジャーナルの評価

90%の被験者が、「日記は、自分のイメージの変化を自覚するのに役立った」「日記を付けながら、以前のイメージや到着後間もなく得たイメージを反省した」と答え、目標文化の新しい側面の発見と、脱一般化に関するジャーナルの効果を確認した。しかしながら、視点を規定するものの自省までは難しく、「フランスやフランス人のある側面が見えた時、一方で、何故自分はその側面を気にするのか考えるようになった」「私の出身文化の価値観が、私のフランスやフランス人に対する視野を決定していると気づいた」については、60%の賛成しか得られなかった。

##### (5) ELP への貢献

本研究について発表および関係研究者との意見交換をする中で、本研究で考案した「異文化間の気づき」を促す指示文が評価され、ヨーロッパで予定されている共同研究に、日本の初習外国語教育のように目標言語話者との出会いが差し迫ったものでない場合の「異文化間の気づき」能力評価の重要性に関する項目が取り入れられることになり、今後新たに提案される ELP において、当該項目の提案とともに本研究策定のガイドライン、指示文が例示される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計3件)

Himeta, Mariko, « A propos de la version japonaise du CECR », in Liddicoat, A. et Zarate, G. (coord.), *La circulation internationale des idées en didactique des langues, Le Français dans le Monde, Recherches et Application*, 2009年7月刊行予定, 査読有

Himeta, Mariko, « Elaboration d un outil menant à la prise de conscience interculturelle », *Etudes didactiques du FLE au Japon* (Péka, Association des didacticiens japonais) No.17, pp.44-63, 2008年. 査読有

姫田麻利子, 「フランス語教育における<文化>の転回、停滞、課題」, 『語学教育研究論叢』(大東文化大学語学教育研究所)第25号, pp. 193-218, 2008年. 査読有

〔学会発表〕(計2件)

姫田麻利子, 「<異文化間能力>の教育の挑戦」(リュシエカナダ, マギル大学ドゥニーズ・リュシエ教授講演への指定討論), 「大学における外国語教育の二つの挑戦: 多言語教育と自律学習」, 2008年1月27日, (主催: 京都大学高等教育研究開発推進機構; 場所: 京都大学芝蘭会館稲盛ホール)

姫田麻利子, パンジェ, マリー=フランソワズ, 「<異文化間の気づき>はひとりで得られるか: 言語バイオグラフィの工夫」, 国際シンポジウム「ICTによる外国語教育と自律学習」, 2007年12月16日, (北海道大学情報基盤センター)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

姫田 麻利子 (HIMETA MARIKO)  
大東文化大学・外国語学部・准教授  
研究者番号 50318698

(2) 研究分担者

H19年度  
パンジェ, マリー=フランソワズ  
(PUNGIER, MARIE-FRANCOISE)  
大阪府立大学・総合教育研究機構・  
准教授  
研究者番号 30316020

(3) 連携研究者

H20年度  
パンジェ, マリー=フランソワズ  
(PUNGIER, MARIE-FRANCOISE)  
大阪府立大学・総合教育研究機構・  
准教授  
研究者番号 30316020